

2023年 特別講座第2回 「脱「搾取・貧困」の『資本論』未来社会論」 質問、感想と宮川 彰 先生の回答、コメント

2023. 10. 8 主催：『資本論』講座東京協議会

DasKapital を読む会

後援：埼玉『資本論』教室

【質問】

Q1： 第1巻①第1篇第1章ロビンソン対比の項、2行目に「自由な人々の……」とあるが、「自由な人々」とは、どのような人々か？ しかし、「個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由」とあるが、「自覚」できなければ自由な人になれない、不自由な人々も存在するのか？ (S)

A1： テキスト該当箇所は、次の通り：「共同の生産手段で労働し自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する自由な人びとの結合体〔ドイツ語：Verein 結社のこと〕」（新版(1)140頁/新書訳(1)133頁/原書93頁）。「自由な人びとの結合体」がどのようなものであるかについて、関係代名詞でもって、原文では後に続く文で〔翻訳では先きだつ修飾句でもって〕：「共同の生産手段で労働し自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に一つの社会的労働力として支出する〔ところの〕」と繋いで、規定(説明)してあります。

「自由な人々」とは次のような含意です。一つには、一資本主義のもとでは一働く人々は生産手段から切り離され〔“剥奪され”〕て自由に利用することが出来なくされていた制約状況から、一未来社会では一社会化されて共同で自由に利用できる条件が開けてくること、二つには、搾取ねらいの強制労働ではなく、社会で計画され統制〔制御〕される事業活動にふさわしく、主体的条件の側でも労働者の自主的自発的なつまり「自覚的」な参画が可能であり必要とされる状況にあること、を指したものでしょう。

この表現の中で「自覚的」と言われるのは、“計画・統制のもとに制御される”労働支出というほどの意味合いです。労働はもともと目的意識的ですから、ここでは、「自覚」できるか否かが問題なのではなく、外的強制にしいられる労働かそれとも主体的自発的に発揮される労働かの対比で、この言い回しがもちいられていると見るべきでしょう。「『自覚』できなければ自由な人になれない、不自由な人々も存在するのか」といった個々人の主観の有る無しが問題になっている記述ではありません。

Q2： マルクスは個人の幸せをどうかんがえているか？ 今はどうなっているか、どうすればいいか。前提をはなさなければ。(M. K)

A2： 二つのセリフをご紹介します。(1) ギムナジウム時代 17歳のマルクスの卒業作文「職業の選択に際しての一青年の考察」の一節。「地位の選択に際して、われわれを導くべき主要な導き手は、人類の幸福であり、われわれ自身の完成である。これら両方の利害が、互いに敵対的に戦いあうことになって、一方が他方を滅ぼさなければならないなどと思ってはならない。そうではなくて、人間の本性というものは、彼が自分と同時代の人々の完成のため、その人々の幸福のために働くときのみ、自己の完成を達成しようようにできているのである。」17歳青年期にすでに、共同社会の中の個人、ならびに、個人の共同社会への関係づけの相互作用について、要するに歴史における個人の役割について、炯眼(けいがん)でもって、いつの時代どの社会にもあてはまる普遍的な洞察を一若者の理想主義と“気負い”をほとぼしらせながら一投げかけているのには感心します。ちなみに、この「利他」と「利己」との相剋は、近現代社会の人間関係の亀裂・分断状況を理解するキーワードをかたちづくっており、ふるくはA. スミス『道徳情操論』による「共感」と「利己心」、社会学者テンニエスの『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』、この後

者が突出した現代の「共助」と「自助」、「自己責任論」などとして、こんにちにまで第一級の社会思潮課題として語り継がれています。

(2) 〈人間が環境をつくるのと同じように、環境は人間をつくる。〉(『ドイツ・イデオロギー』より)。人間の、対自然・対社会の係わり方についての、唯物史観の捉え方です。ひとが自分の幸せをいだくとき、それがどのような社会経済の環境、すなわち、客観的な根拠・理由や条件・背景事情からもたらされるかを物質的土台から唯物論的に明らかにすること、これが、『資本論』という科学的探究の使命として自覚したマルクスの、問題意識だったと思われます。

Q3 : マルクスの変人エピソードを知りたいです。(H)

A3 : マルクスを社会科学上の天才とみとめ人間的にも敬愛できる人物としてその言説に長年付き合ってきた私(宮川)としては、この種の“変人エピソード”お尋ねは、いちばんむずかしい難問です。ちなみに。よく知られたマルクスの“素顔の逸話”に次女ラウラに回答した「マルクスの『告白』」という書き付けが残されています(1860-61年、42、3歳ころ作成。当時子どもたちに流行っていたアンケート・ゲームらしい)。めぼしい問答を拾い上げてみますと、――

「あなたの最も高く評価する特質は、……一般に人間にあっては素朴、男性にあっては力、女性にあっては弱さ。/あなたの性格の特徴は、……一貫した目的を追うこと。/あなたにとって幸福とは、……闘うこと。/あなたにとって不幸とは、……服従すること。/あなたが最も許しがちな欠点は、……軽信。/あなたが最も嫌悪する欠点は、……奴隷根性。/あなたの好きな仕事は、……古本屋漁り。/あなたの好きな料理は、……魚。/あなたの好きな格言は、……人間に関するものは何一つ私に無縁ではない。/あなたの好きな標語は、……すべてを疑え。」さしあたり以上。

どれ一つとってみても、共感や親しみの湧くものばかりで、奇人変人めいたものは見あたりません。有名な“悪筆”も“ヘビースモーカー”も挙げるにあたいせず、窮して回答不能なのです。

Q4 : シミュレーション手法→シミュレーション主義と同じですか。

中味がない、形だけ(階級的な中身感じない人)言う人と事を聞いたことがあります。労働者の苦しみを理解しないで、そういう場をもうけた(企画した)だけで満足している人が……。これをシミュレーション手法と言うのでしょうか。非科学的な人にどう対応し話したら良いか、アドバイスありますでしょうか(ありましたらでいいです)。(O. H)

A4 : 手続きや段取り・手順をいう「手法」と、抛るべきものにつよく依拠する考え方をいう「主義」との違いはありますが、語幹の「シミュレーション」の使い方(「中味がない、形だけ(階級的な中身感じない人)言う」)は、ポイントを衝いておもしろい捉え方だと思います。いわば外形、外見(そとみ)重視主義、のひととの付き合い方とっていいでしょうか。

選択肢が割れるとき、そのどちらが正しいかの判定は実践の結果成果こそが評価・判断の拠りどころになるのですから、事前には出来るだけ議論を出しあい点検しあうことが必要、そして実践ですね。当初、非科学的シミュレーション手法的とネガチブに予想されていた見通しが、対処療法・暫定処置としては、むしろより相応しかつたという事態も起こりうることです。天文現象をめぐる見方で、天動説に固執する人をどう地動説に改宗させるか、という問題がヒントになりそうです。日々の暮らしはみな目に映る天動説にしたがっていて、月食日食などよほどの異変がないかぎり地動説で生活している人はいませんから。

Q5 : つねづね思っていることですが、大学の経済学部では何を教えているのか？ 資本論をマスターして社会変革をと考えている学生が多数になればと期待するものです。(K)

A 5: ソ連崩壊後 新自由主義が吹き荒れて、労働運動の後退、低迷とともに、大学アカデミズムの世界でもマルクス主義経済学の退潮いちじるしい状況です。他の分野、科目もそうですが、地味な基礎科目に代わって、“すぐ役立つ” “すぐ見える” [可視化] 科目が著増し [教える教員も入替えかすすみ]、 「科学よりも実用 (プラグマティズム) を」 の嘆かわしい状況です。

同様の傾向について、エンゲルスがロシアの若手革命家ニコライ・F・ダニエルソン宛て 1888 年 10 月 15 日付け手紙に伝えています。酷似している状況です。

「あなた [ダニエルソン] は、イギリスではどうして経済学がこんなにも惨めな状態にあるのか、と怪しんでおられます。どこでも同じことなのです。古典派経済学も、それどころか卑俗きわまる自由貿易論の切り売り屋でさえも、いまや大学で経済学教授の地位を占めているより卑俗な「より高級な」人種からは、軽蔑の目で眺められている始末です。そうした状況は、かなりの程度まで、われらの著者 [マルクス] の責任によるものです。〔というのは、〕彼マルクスは、〔『資本論』の〕読者らに、古典派経済学 [労働価値説] から導かれる危険な諸帰結 [すなわち剰余価値論=搾取論] を見抜くことを教えたからです。そして、いま彼ら卑俗な人種どもは、少なくともこの経済学の分野ではどの科学をも放棄してしまうことが [自分と自分が代弁する階級にとっては] もっとも安泰だ、ということを見いだしているのです。彼らは平凡な俗人の目を眩くらますことにすっかり成功をおさめていて、いまロンドンでは「社会主義者」と称する人びと [フェビアン協会会員ら] が登場することができるほどになり、そしてこのエセ「社会主義者」らは、著者マルクスの理論に S・ジェボンズの説 [効用価値説] を対置することによって、われらの著者 [マルクスの労働価値説=搾取論] を完全に論破したと主張するにいたっているのです。」

Q6: ① レジメにある「労働全収権説」がよくわかりません。

新日本出版社版の『ゴータ綱領批判』では、「労働全収益」という言葉はでてきますが、これとの関連でしょうか？

② 新日本出版社版の『ゴータ綱領批判』では、「これまで述べてきたことを別としても、いわゆる分配のことで大さわぎをしてそれに主たる力点をおくことは、およそ誤りであった」(P31) とあります。まさに未来社会論を『ゴータ綱領批判』の分配論だけで見ているのは「およそ誤り」だということにならないのでしょうか？ 未来社会論として「主たる力点」を置くべきにはどのようなことがあるのでしょうか？

③ 今回の講座で「生産手段の社会化」を紹介する際に、ソ連のコルフォーズやソフォーズについて紹介されたように記憶していますが、日本社会で「生産手段の社会化」に取り組むときに、ソ連のコルフォーズやソフォーズもその中の一つの事例に位置づけられるのでしょうか？ (N.M)

A 6: ①② 「労働全収権」 right to the whole produce of labour 生産者みずからが働いてつくりあげた成果はすべて働き手のもとに収まるべしという啓蒙思想の一環 (経済学版) のおなじ中身であり、その呼び方のちがいです。

だれからも搾取・収奪されることなく、労働者 (啓蒙過渡期にあつては農民、職人ら小生産者) は、本来、労働生産物すべてを取得する権原・権利をそなえている、とみる啓蒙時代における“自己労働に基づく所有” (私有制の原理) および労働価値説に、強く結びついた考え方です。当時の無為 (不労) 徒食の領主・貴族階級や寺院・騎士階級の支配に対抗し打倒しようとする市民革命思想の土台を支えました。この考え方は、無為徒食の不労階級に取って代わって“働くものが主人公に” との、きわめてわかりやすい道理とつよいメッセージが込められているので、科学的社会主義 [マルクス主義] 登場以前には、経済学でも社会主義の領域でも、それは圧倒的な人気を博しおおきな説得力で浸透していました。とりわけ、古典派経済学のもっとも大きな権威であったリカード学派の継承者らが、彼らの労働価値説に基づいて社会主義思想を構想する際の拠り所、

権威づけ論拠となりました。【この「労働全収権」の考え方は、踏み込んでみると、古典派の経済学「信条」となった「スミスのドグマ」〔“商品の価値または価格は賃金・利潤・地代なる諸収入から構成されるかまたはそれらに分解される”という説〕、と双対となりそれを論拠としていました。このドグマの「利潤・地代」部分をも一労働源泉を論拠に一全て「賃金」に還元すべしとして社会主義的に進化・適用をはかったものが「労働全収権」です。「労働全収権」は、古典派経済学のもっとも大きな権威であったリカード派の労働価値説を出自にしています。彼ら古典派の「信条」命題に結び付けられるほどの「全収権」の根深さを、侮っては、見逃しては、なりません。】

これに対してマルクス主義はといえば、早くには1848年『共産党宣言』以来、1867年『資本論』出版を決定打として、その影響と浸透ぶりは顕著な勢いがありましたが、「労働全収権」説の真の意義・限界、それに対するマルクス『資本論』による根本的批判〔「スミスのドグマ」克服〕、が理解されるにはまだ遠く、当時の社会主義運動、労働運動の世界でも根深く浸透していました。ゴータ綱領の「草案」1875年の内容にあらわれていた最大の弱点や欠陥は、そうした「労働全収権」にいろどられた未来社会構想だったのです。これは古い〔空想的〕社会主義の考え方で、「労働全収権」を払拭できていない、「いわゆる分配」論拘泥の、未熟で誤った未来綱領であるということ、マルクスは見抜いて、心配して怒って、語気鋭く批判・添削しました。【批判の要点は、①生産手段・再生産の確保、②蓄積確保、③生産力開放と飛躍的経済成長・潤沢な富の均霑（きんてん）——これらをテコとして、“平等分配”はじめとする狭いブルジョア的諸権利の克服への見通し、です】。

「草案」の最大弱点は、「労働全収権」に基づくまちがった分配論、世におこなわれているところの「いわゆる分配」論でしたから、この焦点を批判しつつ、本来の、生産関係に基礎付けられそれと不可分な分配関係を組み入れた、ただしい適切な分配論で未来構想を〔綱領に〕描き込むこと、これがマルクスの綱領「草案」批判の眼目だったと思われます。“分配”こそは“生産”の営みの成果の刈入れ・収穫です。合法的なただしい分配論できちんと仕上げの“画竜点睛”をたくかく掲げることは、社会主義、左翼の『存在理由』ほどのおおきな意義でしょう。現体制の搾取・収奪や貧困に日夜虐げられ苛まれている労働者にとって、収穫の分け前をどうするかの分配論を語らないような、またはゆがんでしか語れないような未来論は、まったく生彩欠いたもの、魅力に欠けたものといわざるをえません。【ところで、「搾取・収奪」廃絶や「貧困」撲滅をうたうということは、「分配」という用語こそ用いられていないけれども、〔基礎の生産関係とともに〕分配関係の根本的な転換を伴うところの、社会の富の分配のしくみの抜本的な改造〔革命〕を標榜するのとおなじことだということ、確認しましょう。】

搾取・収奪や貧富格差がかつてなくひどくなった新自由主義の現代にも、働く人びとがきちんと報われる社会の実現は、ひろくつよく共感呼ぶスローガンです。“働く者がつくりあげた成果はすべて働き手のもとに収まるべし”という訴えは、「労働全収権」の名称や歴史由来は知らずとも、いたってシンプルで魅力的で、経済倫理的にみても聞こえのよいフレーズです、“無為徒食”“あぶく銭”をなくせ！”というほどに直感的にわかりやすい。こんにちさまざまな色合いの社会主義像や未来社会論が出まわっていますが、多かれ少なかれこの「全収権」の考え方を共有していると言ってよいでしょう。

しかし要注意です。無批判に「労働全収権」を受け入れるならば、マルクスによって百五十年以上前に批判された「空想的」社会主義の“アナクロニズム〔時代錯誤〕”に陥りさ迷うだけです。この点で、「生産手段の社会化」〔ないしはその維持再生産〕は、「空想ユートピアン」から卒業して、科学的社会主義への到達を際立たせる、決定的な目印キーワードになるはずで、というものは、生産手段の社会化ならびにその維持再生産を理論的に説明できるのは、唯一「労働の二重性」把握で理論武装したマルクス学派だけだからです【：商品生産に従事する労働は、一方の“抽象的

人間労働”の性格で、あたらしい価値を形成付加しつつ、他方の“具体的有用労働”の性格で使いこなした生産手段の価値を新生産物に移し保存する、と】。マルクス派以外は「労働の二重性」を欠落させ、ことごとく「生産手段の再生産〔維持・補填〕」を認識できず、つまり、まともな未来社会像を構想しえず、空想の靄（もや）・砂上楼阁の混迷のなかに、さ迷うほかないからです。

以上、「労働全収権」〔全生産物の価値を諸収入に分解還元してしまう「スミスのドグマ」は、古典派労働価値説を共通の基礎とするふたごの双生児。〕—— 社会の全生産物の消費手段としての“バラマキ喰い潰し”——「生産手段の維持再生産の不可能」という際立つ荒唐無稽な空想性 ⇒ ⇒ これに対する、「労働の二重性」把握による「労働全収権」・「スミスのドグマ」の克服・一掃、すなわち科学的社会主義の確立の契機たる「生産手段の社会化」の至高の意義。これらの相互の—『資本論』で基礎づけられた—緊密な連携について、大づかみしていただけたでしょうか。

③旧ソ連の「コルフォーズ」、「ソフォーズ」は、日本語訳は周知のとおり「集団〔所有〕農場」、「国营農場」です。一様な「国营農場」に比べ、「集団農場」は、地域柄に応じて多様な協同組合的所有と経営が展開していて、自留地の私的経営を含めてあらゆる種類の所有・経営の試みが繰り広げられたようです。当然、日本社会での「生産手段の社会化」の実地具体化の際には、歴史的先行事例として、モデルや反面教材として位置づけられ役立てられるでしょう。

【感想】

【感想1】 「ゴータ綱領批判」の説明は、大変勉強になりました。「未来社会論」で、未来の希望が大きく広がりました。「各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて！」の歴史的説明もよくわかりました。今日的に出される逆流的理論への、きちんとした批判の目も養う必要を感じています。しっかり学習と実践をしていきたいと思います。ありがとうございました。(K. M)

【講師コメント】 「各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて！」は、“人口に膾炙（かいしゃ）する”と呼ぶにふさわしい未来社会論の看板標語です。さきだつ先覚者たち（サン＝シモンやカベーラ）による未来社会探究の数十年の由来や歴史的変遷をたどってみると、紆余曲折を経ながら、マルクスによる科学的社会主義確立の、仕上げ「画竜点睛」のひと筆、のような境地を感じますね。そのバックグラウンドを知ると、『資本論』の独創的な理論的成果がぜんぶ凝縮されて花ひらいたという“共産主義思想の精華”、の趣きです。

【感想2】 共産主義を批判する人の中に“ユートピア”というのをあげ、ユートピアと科学的社会主義のちがいを少しふれられたかなと思います。知的作業の積み重ねが、社会を変えていくことだけは確信できました。ありがとうございました。(G. K)

【講師コメント】 科学的社会主義とは、いたってシンプルなこと〔単純で易しいという意味〕。その呼び名にうかがえるように、あらゆる分野領域で徹頭徹尾に、《科学的合理主義》をつらぬきとおすという立場にほかなりません。神仏超越者にすがって思考停止するような、他力本願、奴隷根性にまみれるのとは正反対に、どこまでも人間理性を信頼して真理真相を追い求めます。

【感想3】 私自身のこれからの方向性にとって、1、独立した人格、それを経済的土台とともに理解することの大切さを理解できたことが大変印象に残りました。2、内在的原因を抽出する姿勢の大切さについて、分かりやすい先生のご説明ありがとうございました。今後活かしていきたいと思います。(A. M)

【講師コメント】 「1、経済的土台に基礎づけての自分さがし、2、内在的原因・真相の探求」という、『資本論』学習に期待される気高い学び志向を、したためられました（ひょっとしてコレ

“決意表明”？だったでしょうか)。講師・主催者にとってなにより誉れ・よろこび・励みです。ありがとうございました。

【感想4】 お世話になります。 経済学批判の1巻～3巻までの重要箇所を教えてくださいありがとうございました。現在、2巻を学習中ですのでこれから第3巻を読んでいくのが楽しみです。

成果主義賃金制度はマルクス以前学派の思想が解りました。(K)

【講師コメント】 現代の「成果主義賃金制度はマルクス以前学派の思想」だと解った、と——この一件だけでも値(あたい)千金の収穫だと思います。乗りかけた舟、ここまできたら第3巻まで全巻読破で、“安心立命”の境地へ！ですね。

【感想5】 今回のテーマは壮大なもので、とても4時間の講座では大変かなと感じました。それでも、『ゴータ綱領批判』の「…必要に応じて」のテーゼがサン・シモン主義やカベール派の標語に対応したものというのは初めて知りました。これからも「資本論講座」でのご指導、よろしくお願いいたします。(N.M)

【講師コメント】 歴史の歩みをたどるとおもしろくわかりやすいです、深み高みが見わたせます。このようなテーゼ標語の成り立ちにさえも、紆余曲折の正・反・合の弁証法プロセスがひかえていたのですね。テーゼ [=サン・シモン派] → アンチ・テーゼ [=カベール派] → ジン・テーゼ [=マルクス]。

【感想6】 激しい物価高、上がらない賃金、負担増と給付減の社会保障、増え続ける軍事費と戦争国家づくり。広がる貧困と格差の拡大。異常な対米従属と財界・大企業最優先の政治、この二つの根本的歪みを大もとから変えなければなりません。

講座では、共産主義社会での社会的総労働の均衡分配。社会的総生産物に即した「剰余」・「必要労働」の割り振り。富の資本主義的取得・領有形態をふまえた「資本蓄積法則」の帰結として、“収奪者が収奪され”“資本主義の吊鐘が鳴る”道すじ。「必然の国」と「自由の国」—「労働日の短縮が根本条件」。「各人はその能力に応じて」労働し、「各人にはその必要に応じて！」分配をうけ取る。科学的社会主義の未来社会論が展開されました。また「労働全収権説」、「コモン=財産共有説」などの謬論が批判されました。日本の未来社会についてなかなかイメージできない今、たまたかの糧として生かしていきたいと思います。(T.M)

【講師コメント】 すばらしい、講義ポイントの過不足ない綴りかたです(通常、キーワードの羅列には、飛躍や重複はつきもので、読み手の行間読み繋ぎの補いがもめられるものですが)。とくに第二段落6行分の記述は、ひと言もゆるがせのない緊迫の、凝縮された適切な筆はこびであり、出色の要約出来映えです。

【感想7】 掲題の論について、ずっとモヤモヤ感を抱いていました。今日の講義を聴講して、なるほどそういうことだったのかと、やっと理解した次第です。私のモヤモヤ感がどこから生じていたのか、それを解きほぐしていただいた講義でした。私の抱いていたモヤモヤ感とは次のようなことでした。本文「各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて！」の共産主義分配論と、同本文にある「これまで述べてきたことは別にしても、いわゆる分配について大騒ぎをしてそれに主たる力点をおくことは何と言っても誤りであった。」の論の区別と関連です。“必要に応じて”の分配論と、“いわゆる分配について大騒ぎ”の分配論とどこが違うのか？後者の“大騒ぎ分配論”は俗論的分配論に陥っていたラサールの「労働の全収益」分配にたいするマルクスの全面的批判であること。また、前者の“必要に応じて”論は、従来からあった標語ではあるが、「勞

働全収獲」の思想でいろいろられた分配主義的な偏向をおびており、マルクスによって鍛え直されたものであること。共産主義社会・本史のステージとしてよみがえらせたものであること。この論は資本論第3巻「自由の国・必然の国」論と符節が確認できること等々。奥深い説明にモヤモヤ感が晴れました。斉藤幸平氏の『ゴータ綱領批判』の新しい読み方なるもの（マルクスの理論的大転換？）批判につながって、大変納得しました。（Y.A）

【講師コメント】 マルクス未来社会論の到達点を、深く精確に的確に読み取り、汲み上げていただきました。よかった、講師冥利ですね。感想にしたためられた内容、例の一つに、「“いわゆる”分配」と〔そうであれば対（つ）に在るだろう〕“本来の”ただしい分配とのあいだの「区別と関連」づけ、それを明かす作業などはけっしてやさしいワザではない、私の体験感覚では学部生や修士院生をこえて博士課程院生レベルの議論のむずかしさでしょうか。その「むずかしさ」というのは、高等数学のような抽象性演繹性に在るのではなくて、ひと言でいって“積重ね”、価値・剰余価値論など、地道な、基礎・基本認識の道理と経験史実の検証による、“積重ね”です。捲まず撓まず諦めずよくぞここまで辿り着かれました。どうかご自分をほめてあげてください！

【感想8】 講義をお聴きし、そしてその後、レジュメ、資料を読み返し、改めて内容の凄さ、充実后感嘆いたしました。『資本論』全三巻プラス『ゴータ綱領批判』による、資本主義的生産様式の成立・発展・崩壊・未来社会の成立・発展を“わしづかみ”、一望のもとに示されています。大いに勇気づけられました。

価値法則にもとづく、搾取、その資本主義的領有への転化、労働者犠牲を条件とする資本蓄積、資本主義的生産様式そのものの発展による搾取の否定、第二巻による、資本主義的生産の維持拡大条件、第三巻による、資本主義的生産の絶対的矛盾の証明（利潤率の傾向的低下法則・資本の真の制限は資本そのもの）、資本の不労性・生産にとって不要な存在。（利子生み資本）、社会的生産管理（信用・銀行制度）、否定の否定で個人的所有の再建、生産力の飛躍的増大による、窮迫と強制を帯びる労働が完全に止揚され、真の公正、平等な分配の実現、という見通しです。

・個人的所有の再建では、資料の中国山東省の共産主義村モデルが、その実現の姿を生き生きと描いていると思いました。現実の運営にあたっては、全収権の分配ではやっていけないことは明らかです。『ゴータ綱領批判』でマルクスがこと細かく、控除すべき項目を挙げていますが、日本の経済・政治に適用してほしいと思います。

・未来社会で、“流した汗が報われる”分配、“やりがい・生きがい”の労働になりますが、労働以外の人間諸能力の自由な発展の実現も当然です。時間の保障、経済的心配がないことに加えて、協業的活動、創造者と享受者のより社会的、親密的な関係などが大きく作用すると思います。前例の中国共産主義村モデルのなかに、「バイオリンを自由に使える音楽室、陶芸教室」が出てきますが、人の欲求も拡大することに対応し、共産主義＝経済のみという狭いイメージを払拭してくれます。

・『高校生からわかる資本論』、池上彰は、階級関係をみないで剰余労働を見るので、搾取を容認するが、高校生でもわかるのだから、階級関係・搾取をきちんと説明し、貧困・気候問題などの課題に対する回答を大人、左翼は示していかなければと思います。

未来社会像とそこへの道筋が理論としてあることは、必ずそこへ到達できることだと思います。特に若い人達にそのことを理解してもらいたいと思います。『資本論』の忠実・精確な学習を皆さんとともに今後も続けていきたいと思います。（Y・M）

【講師コメント】 講義ポイントを丹念に整理要約した、【感想6】とならぶ、すぐれた講義まとめとなりました。とりわけ第二段落6行分の記述は、ご自身の理解に噛み砕いてわがものにし、改めてご自身納得で再生産したシナリオ・プロット（筋書き）をベースに展開されています。ご苦心の努力がみのって、実際の講義のはこびよりもすっきりわかりやすいほどの、上出来映えです。第

三、第四段落のポイントの押さえ方もよし。第五段落、池上見解に寄せて「高校生でもわかるのだから、階級関係・搾取をきちんと説明し、貧困・気候問題などの…回答を大人、左翼は示」すべし、に同意です。末尾のことば、「未来社会像とそこへの道筋が理論としてあることは、必ずそこへ到達できる…。特に若い人達にそのことを理解してもらいたい」、にふかく共感します。ヘーゲルの名言：「理性的なものは現実的であり、現実的なものは理性的である」（『法の哲学』序文）、その前半のフレーズ、客観的な法則に適った道理あるものは、不可避必然に現実に顕現する、と同じ趣旨でしょう。科学的合理主義と別のものでない、科学的社会主義の展望への確信の源。（以上）